

# 東京・山谷で身寄りがいない人の在宅ホスピスケアに取り組んでいます。

山本雅基さん やまもと・まさき 「きぼうのいえ」(在宅ホスピスケア施設) 代表理事 施設長

山本雅基さんが東京・山谷に身寄りのない人が最期を過ごす住まい『きぼうのいえ』を開設したのは'02年。これまでに30人以上を看取ってきた。

21の個室はガン、HIV、重い慢性疾患などを抱えた人たちが常に満室だ。「家も金も家族もない上に重い病気を抱えた人たちに、もう一度、生き直してもいい、生きるのも悪くない、と最期に思ってもらえる場が作りたくて」

幼い頃、路上で暮らす人や白衣や軍服姿で物乞いする人を目にするたびに胸がはりさけそうに辛かったことをよく覚えている。倉田百三やドストエフスキーを愛読した早熟な少年は、入学した高校の質実剛健な校風になじめず、



「タカさん、どこまでお散歩？」「さあねえ」。91歳の入居者タカさんと山本さんは仲良しの祖母と孫のよう。



心臓と腎臓疾患の健蔵さんは温かな介護で笑顔を取り戻した。

のは、哲学ではなく宗教かもって」

人生は不条理の連続。不運や不幸が避けられないのなら、たとえ微力でも荷を負わされた人の力になれないか。

「それが僕の存在理由と思いついて」

まじめでひたむき、それゆえ不器用。27歳で上智大学神学部に入學したものの8か月で修道院をドロップアウト。「だめでした。女の子にときめいちゃうし、結婚したい気持ちも手放せずに」

大学だけは卒業し「子どもが遠距離の病院に入院する家族の宿泊施設を作る活動」に参加。10年間、尽力し、うつ病のために離職。病床で考えたのが、身寄りのない人たちのホスピスだった。

家や家族がなければ自分も遠い昔に胸を痛めた路上の人々と同じ。彼らを支え、ともに生きることがやっぱり自分の存在理由。それでいい。新しい気づきが力になった。そこからは天の采配としか思えないような出来事が続く。

'01年、ホスピスボランティアの社会人講座で妻の美恵さんと出会う。大切な人を失い、新しい人生に踏み出したばかりの美恵さんは、山本さんに計画を打ち明けられた時もひるまなかった。

## 山本さんが「きぼうのいえ」を建てるまで

1963年、東京で生まれる。'85年の日航機墜落事故に大きな衝撃を受け、神父を志す。独学で勉強を続け、'90年に上智大学神学部に入學。同年、小児ガン治療のため、都内の病院に入院する子どもの家族が宿泊できる施設＝ファミリーハウスをつくる運動に参加。自宅を事務所提供し、国から予算支援を勝ち取るまで尽力。2000年に体調を崩して退職。病床で、山谷にホスピスを開設することを決意する。スタッフを募るために参加した上智大の市民講座、ホスピスボランティア講座で、受講生だった美恵さんと出会う。'02年1月、美恵さんと結婚。'02年10月、「きぼうのいえ」を開設。

「一度終わったと思った人生。飛び込むも、心のまま生きようと思いました」

'02年に結婚。無謀と言われながら、ふたたび物件探しと資金繰りに奔走した。幸運の重なりと大勢の人の協力で開設できたものの、運営はギリギリ。

それでもこの仕事は使命、と胸に刻む。「今は特定の宗教にとらわれないけれど、人の力を越えた大きな力の存在は信じています。死にゆく人はもちろん僕自身も、それに近づくことで心の安息が得られるような気がしているから」



「美恵さんを見た瞬間、心がドカーン!」「私もその瞬間、この人たなあって。ストレス解消は散歩。毎晩、5、6km歩く。



礼拝堂は宗教のバリアフリー。キリスト教の祭壇に仏具が同居。ボランティアで浄土宗の僧侶、山田義浩さんは「呼ばれてしまった。そんな感じ」。